

拝殿

拝殿は、本殿の中で一番大きな部屋で、本殿に祀られている神々に祈りを捧げる外陣である。天井には、青い菊の上に描かれた 140 体の金の龍が飾られている。それぞれの龍は一点ものである。これらの龍はいずれも、狩野派の祖であり、十七歳の時から徳川幕府の御用絵師として活躍した狩野探幽（1602～1674）の作品である。

天井に吊るされた金の天蓋は家光の妹から、大きな青銅の骨壺と燭台は尾張・紀伊・水戸の徳川家から贈られたものである。

合の間（国宝）

合の間は、拝殿と本殿の間の空間である。部屋の端には祭壇があり、その後ろには本殿に祀られている神像が祀られている。本殿は一般公開されていないため、参拝者はこの祭壇に祈りを捧げることができる。

祭壇の左右には、昇り龍と下り龍の 2 頭の龍が祀られている。また、彫刻や天井に描かれた菊などの中の、部屋の至る所に鳥のモチーフが見られる。

唐獅子と彫刻

中国風の獅子は、拝殿の装飾によく見られるモチーフである。上は合の間の入り口の彫刻の詳細で、下は拝殿の襖に描いた狩野探幽の作品である。